京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（5 年計画の 1 年目）

1. 研究課題

ポスト=ヒューマン時代の起点としてのフランス象徴主義

French Symbolism as the Starting Point of the Post-human Era

2. 研究代表者氏名

森本　淳生

Morimoto Atsuo

3. 研究期間

2021 年 4 月-2026 年 3 月(1 年目)

4. 研究目的

19 世紀を通じて大きな成長をとげた資本主義経済とテクノロジー、識字率の向上と出版・メディアの発展、第三共和政とともに決定的となった世俗化=脱キリスト教化は、社会と人々のメンタリティを決定的に規定すると同時に、こうした事態に対する批評意識を生み出した。フランス象徴主義はその端的な表現である。象徴主義者たちは、ブルジョア社会と産業資本主義に強い嫌悪感を示しているが、貨幣やテクノロジー、同時代の経済社会に対する考察は、その思索の本質的課題のひとつである。また、伝統的な信仰が成立しなくなった時代にあって「超越」との新たな関係が模索される。こうした社会や技術、宗教をめぐる省察を背景として、文学と芸術の新しい方式が、自由詩や内的独白をはじめとする様々な技法上の試みを通して追究されたが、そうした技法的変革も、自己の社会的規定性に対する批評意識によるものである以上、自己自身のあり方の変革を伴うものだった。詩人はたんに作品を書く人間ではなく、作品制作を通して自己の実存を変える者なのである。現在、グローバル経済と金融資本主義が席巻し、新しいテクノロジーが社会を一変させているが、私たちはその恩恵を享受するとともに強い息苦しさを感じてもいる。伝統的な信仰は瀕死の状態だが、原理主義や新興宗教が勢いを持ち、他方で「世界の終焉」が強く感じられる中で、近代的な「人間」以後の生存のあり方が模索されてもいる。19 世紀後半に象徴主義が取り組んだ問題は、今日、こうしたポスト=ヒューマン時代を生きる私たちが直面する課題に通じる。その「起点」として象徴主義を複眼的に捉え直し現代を理解する示唆をえること、これが本研究の目的である。

The important factors in 19th century European development—capitalism and technology, literacy rates and publishing, secularization or de-Christianization made decisive with the advent of the Third Republic—not only determined the direction of modern society and public thinking but also created a critical

consciousness regarding that situation. French symbolism was its precise expression. Although the symbolists displayed hatred of bourgeois society and industrial capitalism, they regarded technology, finance and economics as essential themes of their reflection. And, in an age when traditional faith had lost its influence, they sought a new relationship with "transcendence." It is against this background concerning society, technology, and religion that symbolism pursued new modes of literature and the arts through various techniques, such as free verse and internal monologue. However, this technical revolution, because it resulted from a critical consciousness of the socially determined self, was inevitably accompanied by a revolution of the self; a poet is a person who not only writes a piece but changes his/her own existence through such production. Today, new technologies have radically changed the world, and the global economy, together with financial capitalism, dominate it. We enjoy their benefits but, at the same time, we feel greatly suffocated because of them. Although traditional faith is in its death throes, fundamentalisms and new cults are exerting growing influence. Feeling that "the end of the world" is near, we seek a new mode of existence which will come after the "human" in the modern sense. These problems we face in this post-human age share much with those that symbolism tackled in the second half of the 19th century. The purpose of this study is to reconsider symbolism from multiple perspectives as the "starting point" of the post-human era and to posit some suggestions that may allow us to understand our times.

5. 本年度の研究実施状況

研究初年度にあたる本年度は、研究計画に基づく各メンバーの担当を踏まえた研究報告を行い（計 11 名）、象徴主義に関する各人の知見――韻律、理論、録音、雑誌、文学キャバレー、アナーキズム、宗教、話法、演劇など――の共有に努めるとともに、今後の研究方向についても議論を重ねた。平行して、ルネ・ギルの『至善の生成（Le Meilleur devenir）』訳読会を行い、日本語訳と訳註の作成を進めた（計 4 回開催）。ギルの作品は象徴主義の一面を示す重要なものであるが、きわめて難解であり、この詩人のマイナー性もあって、フランスにおいてすらこれまで十分に読解されてこなかった。本作の理解を共有することで、今後議論を進めるうえでの班員共通のプラットフォームが構築される効果も期待できる。訳読自体はテクストの難解さのため思ったよりも進まなかったが、研究報告は順調に行うことができた。毎回活発な議論が行われる有意義な研究会となっており、実施状況は良好である。

6. 本年度の研究実施内容

2021-04-24 「象徴主義研究」例会（1） 「象徴派風の詩句とは？ーー「韻文詩の危機」と自由詩の誕生」 発表者 鳥山定嗣 名古屋大学大学院人文学研究科 司会 森本淳生

2021-06-20 「象徴主義文献の翻訳と註釈（ルネ・ギル『至善の生成』）」(1) ルネ・ギル『至善の生成』IV 翻訳解説 発表者 森本淳生 ルネ・ギル『至善の生成』V 翻訳解説 発表者 鳥山定嗣 名古屋大学大学院人文学研究科 司会 森本淳生

2021-07-25 「象徴主義研究」例会（2） シャルル・クロ周辺から見る象徴主義 発表者 福田裕大 近畿大学国際学部 象徴主義の／と理論 発表者 森本淳生 司会 森本淳生

2021-09-25 「象徴主義研究」例会（3） 文学・芸術キャバレー「シャ・ノワール」と文学の集団性の諸問題 発表者 岡本夢子 東京大学大学院人文社会系研究科 象徴派の「小雑誌」入門にかえて――1890 年代の若い世代の役割を中心に 発表者 合田陽祐 山形大学社会文化システム研究科 司会 森本淳生

2021-09-26 「象徴主義研究」例会（4） ルネ・ギルについて 発表者 森本淳生 ルネ・ギル、進化論、ポストヒューマン 発表者 熊谷謙介 神奈川大学国際日本学部 司会 森本淳生

2021-11-13 「象徴主義研究」例会（5） 象徴主義と宗教 発表者 大出敦 慶應義塾大学法学部 フェリックス・フェネオン再考 発表者 山田広昭 東京大学大学院総合文化研究科 司会 森本淳生

2021-11-14 「象徴主義文献の翻訳と註釈（ルネ・ギル『至善の生成』）」(2) ルネ・ギル『至善の生成』VI 翻訳解説 発表者 熊谷謙介 神奈川大学国際日本学部 コメンテーター 久保昭博 関西学院大学文学部 ルネ・ギル『至善の生成』VII 翻訳解説 発表者 中畑寛之 神戸大学人文学研究科 コメンテーター 足立和彦 名城大学法学部 司会 森本淳生

2022-01-29 「象徴主義研究」例会（6） 詩を発話と捉えた時のマラルメの文体 発表者 松浦菜美子 関西学院大学文学部 象徴主義演劇理論とトランスヒューマンの交差点／東西の交差点としての世紀末パントマイム 発表者 中筋朋 人間・環境学研究科 司会 森本淳生

2022-03-19 「象徴主義研究」例会（7） 『ルーゴン＝マッカール叢書』における都市風景の表象 発表者 野田農 早稲田大学 自然主義から離れて：1880 年代後半のモーパッサン 発表者 足立和彦 名城大学 司会 森本淳生

2022-03-20 「象徴主義文献の翻訳と註釈（ルネ・ギル『至善の生成』）」(3) ルネ・ギル『至善の生成』VIII 翻訳解説 発表者 松浦菜美子 関西学院大学文学部 コメンテーター 合田陽祐 山形大学社会文化システム研究科 司会 森本淳生

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

森本淳生、藤野志織

学内

村上祐二(文学研究科)、中筋朋(人間･環境学研究科)

学外

野田　農(早稲田大学創造理工学部)、岡本夢子(東京大学大学院人文社会系研究科)、鳥山定嗣(名古屋大学大学院人文学研究科)、小倉康寛(南山大学)、福田裕大(近畿大学国際学部)、合田陽祐(山形大学社会文化システム研究科)、熊谷謙介(神奈川大学国際日本学部)、西村友樹雄(一橋大学言語社会研究科)、山田広昭(東京大学大学院総合文化研究科)、久保昭博(関西学院大学文学部)、橋本知子(千葉大学大学院人文科学研究院)、足立和彦(名城大学法学部法学科)、坂巻康司(東北大学大学院国際文化研究科)、松浦菜美子(関西学院大学文学部)、中野知律(一橋大学社会学研究科)、大出　敦(慶應義塾大学法学部)、中畑寛之(神戸大学人文学研究科)、フォコニエ・ブリス

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数(必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者(40歳未満)	若手研究者(35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者(40歳未満)	若手研究者(35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	3	10		2	2	5	42		11	11	10
		(7)		(1)	(1)		(20)		(10)	(10)	
国立大学	7	10		2	1	1	74		16	8	1
				(1)	(1)				(8)	(8)	
公立大学	1	1					1				
		(1)					(1)				
私立大学	7	8		1			66		9		
		(1)		(1)			(9)		(9)		
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関											
その他 ※											
計	18	29	0	5	3	6	183	0	36	19	11
		(9)	(0)	(3)	(2)	(0)	(30)	(0)	(27)	(18)	(0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例）高校教員 無所属の場合は機関数０とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	0			
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	1	(1)	0	
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0			
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0			
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0			

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
Les chaînes trajectives de la réception et de la création. Une étude franco-japonaise en traductologie	1	R3.10	Valéry et la traduction : Comment traduire la poésie ? Qu’est-ce que traduire ?	Teiji Toriyama
受容と創造における通態的連鎖ー日仏翻訳学研究	1	R3.9	ヴァレリーと翻訳――詩をいかに訳すか、翻訳するとはいかなる行為か	鳥山定嗣
Alternative francophone : Néojaponisme et renouveau contemporain des relations culturelles France-Japon	1	R3.4	La Traduction comme emprunt : Les《 poèmes empruntés au japonais 》par Jacques Roubaud	Teiji Toriyama

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
Nord-Est	1	R.4.3	世紀末小雑誌からみる前衛の制度化の試み――『プリューム』の「夕べ」と若手グループの誕生――	合田陽祐
人文論究	1	R3.9	ボードレール「パリ情景」の叙事詩性をめぐって	松浦菜美子
フランス語フランス文学研究	1	R3.8	アンドレ・ブルトンにおけるドキュメントの問い--「ありのまま」の記述についての一考察	藤野志織
フローベール　文学と〈現代性〉の行方	1	R3.10	フローベールを語る――一八八〇年代のモーパッサン	足立和彦
ユリイカ	1	R3.4	アラベスクの詩学 ： マティスとマラルメ	熊谷謙介
受容と創造における通態的連鎖―日仏翻訳学研究	1	R3.9	ゾラ『ナナ』における都市風景の翻訳	野田農
Les chaînes trajectives de la réception et de la création. Une étude franco-japonaise en traductologie	1	R3.10	La traduction des paysages urbains dans *Nana*	Minori Noda
人文社会科学研究	1	R.4.3	日本におけるエミール・ゾラの翻訳の歴史と作品受容	野田農
フロベール＜現代性＞の行方	1	R3.10	フィギュールとしての二月革命	橋本知子

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
仏文研究	1	R3.10	État du rêve diurne. Note sur la technique narrative de Christine Brooke-Rose et d'Alain Robbe-Grillet	Tomoko Hashimoto
Dayre, Godeau,(D')après Flaubert, Kimé	1	R3.5	Figure de l'éblouissement, ou comment donner forme à l'informe ? Madame Bovary par Vincente Minnelli	Tomoko Hashimoto
Bulletin des Amis d'André Gide	1	R3.9	Gide versus Cortot	Yukio Nishimura
STELLA	1	R.3.12	《サント=ブーヴに逆らって》の転生――プルースト小説の執筆後半期における美学的思索の配置と変奏――	中野知律
Poétique du Chat Noir (1882-1897)	1	R3.5	Maurice Donnay, créateur de la légende du Chat Noir	Yumeko Okamoto
Études de langue et littérature françaises	1	R.3.8	Les écrivains dans la vogue du monologue fin-de-siècle. Les enjeux des monologusites et des monologueurs	Yumeko Okamoto
日本ヴァレリー研究会ブログ「Le vent se lève」	1	R4.3	ジャン・モレアス「アニェス」(『情熱の巡礼者』所収)――翻訳と註解の試み	森本淳生・鳥山定嗣

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

次年度も基本的に同様の枠組みで研究班を開催する。研究報告をまだ行っていない残りの班員による発表、および、ルネ・ギル『至善の生成』訳読会である。研究報告はこの第二年目で概ね全ての班員を一巡し、ギル訳読会も本文をほぼ読み終える予定である。あわせて、象徴主義に関する「読む事典」の項目執筆について、次年度中にいくつか見本となる項目を具体的に執筆し、完成への道筋をつけたい。

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

6 月 11 日に人文研アカデミーの枠組みを使って、外部ゲストを講演者、班員をコメンテーターとするシンポジウム「ヴィリエ・ド・リラダンとフランス象徴主義――『残酷物語』と『未来のイヴ』が現代に語りかけてくるもの」を開催し、本研究班の知見の一部を一般に向けて発信する予定である。ギル訳読会の成果は次年度を通じてとりまとめ、第三年度に『人文学報』に掲載したい。